

令和5年12月27日

日立理科クラブ通信



日立理科クラブ

No. 216

「理科室のおじさん」を訪ねて2 日立市立久慈小学校

今回は、久慈小学校（木村央校長）の加原俊樹さんです。加原さんは今の岡山県美咲町の出身です。子どもの頃から好奇心旺盛で、初めてのものを見たり、確かめたりするのが好きだったそうです。家の近くの鍾乳洞に入ったり、野山を駆け巡ったりしてよく遊んだそうです。

理科クラブに入る前は、日立製作所の日立研究所、日立工場、エネルギー研究所で燃料電池やリチウム電池、ガスタービンなどの研究開発を担当していました。最先端の技術を研究していたのですね。

理科室のおじさんとしては、久慈小学校が12年になります。理数アカデミーも担当しています。

理科室では、先生方とメモのやりとりをしてコミュニケーションを図りながら、実験の準備や理科室の整理整頓などを行っています。その中で、子どもたちが大きな失敗をせずに安全に実験できるように様々な工夫もしています。例えば、水上置換の実験では、酸素や二酸化炭素のガスボンベを使いますが、ガス量をコントロールできるような器具（ガス量コントローラー）を紹介しています。これは、とても役に立つ器具ですので、学校でもぜひ使って欲しい器具です。また、電磁石のコイル巻きをするときにコイルのもつれを防止するように工夫しています。このような工夫を通して、子どもたちが、実験や観察をして、「なるほど」と納得して笑顔になったのを見るのが楽しみだそうです。

子どもたちに伝えたい言葉に、朝永振一郎博士の言葉「不思議だと思うことこれが科学の芽です... なぞがとける、これが科学の花です」という言葉があります。朝永博士はノーベル賞を受賞した物理学者です。この言葉は、理科室にも掲示されていました。疑問に思うことが科学のスタートですが、加原さんは、子どもたちが科学に興味を持ってくれたらという思いで仕事をしているようです。

理科室には、他校にはないメディア室があります。ここに児童の科学研究作品や発明工夫作品が掲示されています。また、加原さんが作った科学おもちゃやいろいろな資料が展示されています。メディア室をのぞいていると、清掃中の子どもたちが寄ってくれました。

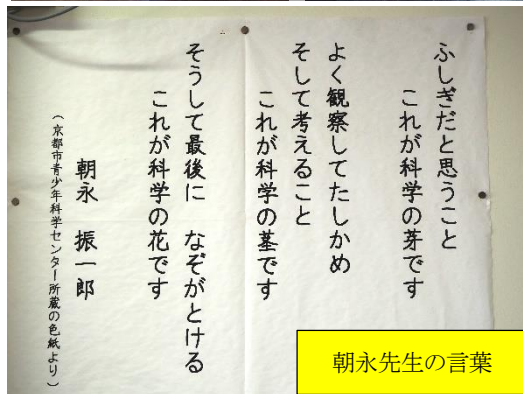
最後に久慈小学校のよさを聞きました。子どもたちは挨拶がよくでき、とてもあかるく元気があるとのことです。この取材でもそれを感じました。グラウンドには大きなケヤキが3本あります。このケヤキは日立市の保存樹で、100年以上も子どもたちを見守っている木です。学校やこの地域の人々はとても大事にしています。また、校庭や校舎からは日立港が見え、広い海に大きな船や漁船なども見えます。素晴らしい環境の中で子どもたちは学習しているのを感じました。



「理科室のおじさん」加原俊樹さん



教材の工夫



朝永先生の言葉



資料が展示されたメディア室



日立港のながめ



グラウンドのケヤキ